

Total Rehabilitation Research

Printed 2014.2.28 ISSN2188-1855

Published by Asian Society of Human Services

*F*ebruary 2014 **1**
VOL. **1**



Youngdoo YOON
[Modern Times]

CASE REPORT

自閉症児の興味を引き出し意欲を育てるための 指導法

～視聴覚機器を利用した授業実践を通して～

杉尾和美¹⁾ 神園 幸郎²⁾

1) 琉球大学教育学研究科

2) 琉球大学教育学部

<Key-words>

自閉症スペクトラム障害, 特別支援学校, ICT 機器, 音楽, リズム学習

takazu2525@gmail.com (杉尾和美)

Total Rehabilitation Research, 2014, 1:105-114. © 2014 Asian Society of Human Services

I. はじめに

近年、特別支援教育の学校現場の動向として、木村（2012）は全国的に特別支援学校（知的障害）及び特別支援学級（自閉症・情緒障害・知的障害）在籍者が増加傾向にあるとし、その背景について、「自閉症のある児童生徒の在籍割合が増加したこと、また、知的障害者を教育する特別支援学校に多く在籍する自閉症のある児童生徒への教育対応の変化があるのではないかと述べている。自閉症の子どもたちの増加に伴って、特別支援教育における自閉症教育のもつ重要性はさらに増しているといえるであろう。

自閉症児の中には、重度の知的障害を伴う子どもや、なかなか指導の効果が見えにくい子どもがおり、その中には、中学部の新しい授業形態等になじむまでに長い時間がかかる生徒が見受けられる。そのような生徒には、「指示待ち」や「無気力」と言われる状態が見られたり、日々の活動の中でも、意欲的な部分をあまり感じさせないことが多い。太田・永井（1992）は自閉症者の思春期の特徴として、こだわりや強迫症状、自傷行為、他害などの問題や鬱病を含めた周期性の気分変動、また、上述の「指示待ち」と近い形であると思われる「無気力」が目立つことも少なくないことを挙げている。このように、「意欲」に関する問題は、思春期の自閉症児にとって解決すべき重要な課題の一つである。

本研究では、意欲を「知的活動についての動機づけ（勉強などの知的なことを達成しようとする行動）」（桜井，1997）と定義し、学習活動に対する意欲を喚起する指導法の開発と実践を行った。学習には、ICT（Information and Communication Technology）を活用した視聴覚機器として、iPad（Apple Inc.）を使用し、教材としての有効性についての検証を行った。

Received

December 26, 2013

Accepted

February 9, 2014

Published

February 28, 2013

Ⅱ. リズム感獲得とゲームソフトの活用

一般的な音楽の授業におけるリズム学習は、視覚支援・聴覚支援・触覚（身体的な）支援による手立てにより、行われていることが多い。そのような現状の中で、リズム感の良い子どもは、幼児期からの育ちの過程で、いつのまにかリズムを獲得し、「リズム感がある」といわれる音楽的行動を示すことが多い。そして、リズム感覚がぎこちなく感じられる子どももまた、そのままの音楽的行動にあまり変化のないままに育っていくことが多い。

一般的に、学校における音楽活動の中で、前述した視覚支援・聴覚支援・触覚（身体的な）支援により、リズムの学習を様々な形態（リトミックや学習発表会等）で取り入れ、それぞれの子どもの発達を促しているが、リズム感については、獲得した子どもとなかなか獲得できない子どもに分かれていく。その子どもたちが、幼児期から小学部、中学部、高等部と学齢期を過ごしていく中、リズム感のぎこちない子どもたちへの指導については、簡便な実行性と即効果が期待できるような手立ては、まだ確立されていない。

そのため、音楽に合わせて太鼓を叩きリズムを刻む、「太鼓の達人」（バンダイナムコゲームス）というゲームの活用を試みることにした。太鼓の達人においては、更なる視覚支援として、音符を表すマークがアニメーションとして動くことで音符の長さや叩くタイミングを表し、常に流れていく音楽の動きをアニメーションで視覚的に表している。そのため、目と耳と手の協応が促されるのではないかと予想される。太鼓の達人において想定されるリズム感獲得のプロセスを図1に示す。

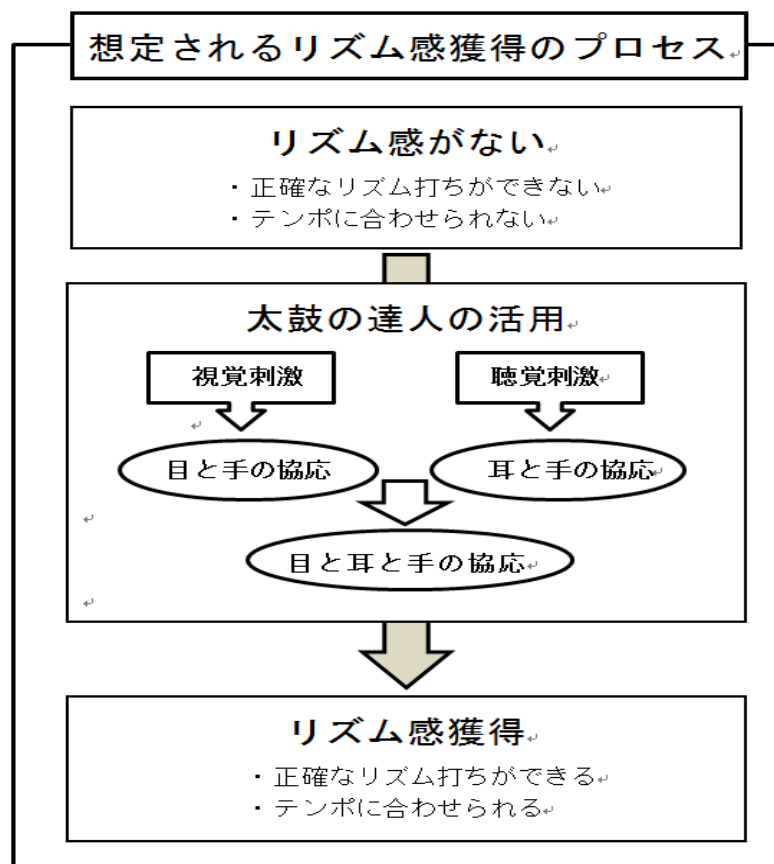


図1 想定されるリズム感獲得のプロセス

Ⅲ. 方 法

1. 授業

A 特別支援学校中学部の音楽と自立活動の時間に、iPad 用の音楽ソフト「太鼓の達人」を利用した授業を実施した。授業の実施計画は筆者が作成し、学校で実際にその学習グループを担当する教員が授業を進めた（平成 24 年度 2 学期に実施）。

2. 対象

対象者は、中学部 3 学年の 17 名。音楽の授業については、障害の種類や程度に基づいて二つの学習グループを組織した。音楽 A グループは、9 人、音楽 B グループは、8 人であった。また、各グループから、2 名ずつの自閉症児を抽出して、個別的な観察を行った。さらに、音楽 B グループから抽出した 2 名については、自立活動の授業も別個に実施した。それぞれのグループの実態と授業回数等については、表 1 に示した通りである。

表 1 検証授業対象者の実態と授業回数一覧

グループ	生徒の実態	対象人数	授業回数
音楽 A	教科を中心とした学習を行うグループであり、会話ができる生徒が多く、指示に応じることができ、身体的には援助を要さない生徒たちがほとんどである。自閉症、ダウン症候群の生徒が中心である。	女子 2 名 男子 7 名 計 9 名	週 1 回 (45 分) × 7 回 * 週 2 回の音楽の授業のうち、1 時間を本研究の対象として、検証授業を実施した。
音楽 B	自立活動を中心とした学習を行うグループで、簡単な会話ができる生徒や簡単な指示はわかるが会話は難しい生徒、また、自閉性障害からくる行動面に問題を抱える生徒等を含む。	女子 2 名 男子 6 名 計 8 名	週 1 回 (45 分) × 7 回 * 週 1 回の 2 時間連続授業であるため、その中の 1 時間分を検証授業の内容として実施した。
自立活動	B グループの中から担当者が同じである 2 名の自閉症生徒を抽出した。身体の動きに問題はないが、こだわりが強く、行動面に配慮を要する。	男子 2 名 計 2 名	週 1 回 (25 分) × 7 回 * 前半は違う日にそれぞれ実施していたが、途中より同時に交互に行う方法に変更した。

3. 解析方法

(1) ビデオ録画によるデータの解析

それぞれの対象授業について、2 台のビデオカメラを使用し、記録を行った。音楽 A、音楽 B については、それぞれ合計 630 分 (45 分×7 回×2 台)、自立活動については、合計 350 分 (25 分×7 回×2 台) の映像を記録した。そのビデオを観察し、活動記録として文章化する作業を行うとともに、それぞれの活動の解釈も同時に行った。

(2) 抽出児のプロフィール

【生徒 A】

男児。精神遅滞、自閉性障害の診断あり。普通小学校（特別支援学級在籍）から、A 特別支援学校（知的障害）中学部に入学する。「知的障害の教育課程」の中で、教科別の指導または各教科等を合わせた指導を中心とした学習を行うグループに所属している。身近な公共施設の利用や、お金を使った買い物など、日常の活動は一人でできる。簡単な日常会話をしたり、自分の考えや気持ちを簡単な文章で書いたり話したりすることができるため、一斉授業にも対応できる。音楽的な面では、歌詞を覚えて歌うことができる。身体表現なども積極的であるが、少し動きにぎこちなさを感じる場合もある。好きな曲に対してはこだわりがあり、曲名を周囲に伝えようとする行動がみられる。

【生徒 B】

男児。精神遅滞、自閉症の診断あり。普通小学校（特別支援学級在籍）から、A 特別支援学校（知的障害）中学部に入学する。「知的障害の教育課程」の中で、教科別の指導または各教科等を合わせた指導を中心とした学習を行うグループに所属している。簡単な言葉で自分の要求を伝えることができるが、日常の活動に部分的な支援を必要とする。また、くり返しにより獲得した係活動や基本的生活習慣などは、身につけている。集団での学習活動ができ、簡単な語句や短い文を読んだり書いたりすることができる。音楽的な面では、知っている曲を聴くと笑顔になり、覚えている童謡等は部分的に歌える。身体表現等では、少し動きにぎこちなさを感じる場合もある。

【生徒 C】

男児。自閉性障害の診断あり。普通小学校（特別支援学級在籍）から A 特別支援学校（知的障害）中学部に入学する。「知的障害の教育課程」の中で、自立活動を中心とした学習を主にを行い、発達段階に応じて一部教科別の学習を行うグループに所属している。簡単な言葉で自分の要求を伝えたり、簡単な指示を理解したりすることができるが、日常の活動に言葉がけなどの部分的な支援を必要とする。基本的生活習慣については、言葉がけなどの支援を多少必要とする場合もある。少人数での学習活動を中心に行っている。音楽的な面では、歌詞を覚えて歌うことができ、多くの曲を知っている。リズム感も良い。身体表現等では、曲に合った動きを覚え、積極的に笑顔で身体を動かす様子が多く見られる。自由時間にも、音楽を聴いて過ごすことが多い。

【生徒 D】

男児。精神遅滞の診断あり。A 特別支援学校（知的障害）小学部から、A 特別支援学校中学部に入学する。「知的障害の教育課程」の中で、自立活動を中心とした学習を主にを行い、発達段階に応じて一部教科別の学習を行うグループに所属している。簡単な言葉で自分の要求を伝えたり、簡単な指示を理解したりすることができるが、日常の活動に言葉がけなどの部分的な支援を必要とする。基本的生活習慣については、言葉がけなどの支援を多少必要とする場合もある。少人数での学習活動を中心に行う。音楽的には、子ども向けの歌や授業でくり返している曲では笑顔が多く見られ、ビデオ映像での音楽鑑賞などでも集中して画面を見ることができる。身体表現等では、言葉がけの支援を受けながら、積極的に笑顔で身体を動

かす様子が多く見られる。

IV. 各授業の活動内容と効果

1. 音楽 A の授業

毎時間、必ず全員が、みんなの前に出てゲームをするようにし、それぞれのグループや個人に合わせた支援を行った。単元の途中からは、一人ずつのゲームの他に、二人で対戦する内容も加え最後には四人での対戦も取り入れた。その結果、相手を意識した行動や言動が、多く見られるようになった。

誰を相手にすると自分に有利か考えて相手を選んだり、対戦後の結果を見て負けた悔しさに涙を流したり、次回への意気込みを声高らかに発言したり、障害の違いに関係なく、高揚した感情表現が表出していた。単元計画の後半には、トーナメント方式のゲーム大会を企画したが、賞品や順位目標といった強化子の影響で、ますます意欲的にゲームに集中している生徒が多かった。ダウン症候群の生徒たちの意欲的な様子が、授業の雰囲気さをさらに盛り上げ、そのことが感情表現の苦手な生徒へも良い影響を与え、高揚感を感じとっている様子が窺えた。また、悔しさや次回への意欲など様々な発言も飛び出し、本授業が生徒たちの感情を揺さぶる効果があったのではないかと推察された。

また、授業実施 1 年後にトーナメントの優勝者である生徒に、優勝トロフィーのことを尋ねてみると、「大切に飾ってある」との答えが得られ、授業内容に伴う感情変化を長期間にわたって記憶にとどめている事が確認できた。

2. 音楽 B の授業

音楽 A の授業に参加している生徒に比べて、障害が重度の生徒や言語での感情表現が難しい生徒も多いが、画面を叩く手の動きや表情の変化から楽しく授業に参加していることが推察された。

他の生徒のゲーム時には、みんなで声援を送りリズム唱を行うなど、学習グループ全体としての楽しい雰囲気を共有していることが見て取れた。

援助がより必要な生徒のグループでは、先に示した同じ条件での対戦は難しかったが、自分の好きな曲にそれぞれ挑戦するお楽しみの時間を設定してみたところ、デモで流した曲を聴いて好きな曲を選ぶ様子や、意欲を感じさせる表情の変化や体の動きが多く見られた。援助がより必要な生徒たちは、ゲームの評点があまり高くない場合もあるが、この授業を楽しんでいる様子からは、このゲームがそれぞれの快の情動をくすぐる体験となっていることが推察できた。

3. 自立活動の授業

B グループから抽出した生徒 C と生徒 D は、1 人の担任教師が 2 人の生徒を担当し、日々の活動を行っている。学級担任が関わる以外の授業でも、同じように 2 人 1 組で担当されている場合がほとんどである。そのような状況の中、自主的には友だちとのかかわりが難しい 2 人の発達段階からすると、担任を独り占めしたい気持ちが強く、担任を巡る競争意識や嫉妬心があった。しかし、今回の太鼓の達人のゲームを、交代でくり返す方法を続けたことで、1 回約 2 分の曲が終われば、次は自分の番であるという見通しがもてるようになった。途中

待ちきれずに、相手のゲーム中に支援している担任に合図（触ったり、叩いたり）をし、暗い表情でじっと見つめているような場面もあったが、次第に慣れ、自分の順番を待つことができるようになった。ときには、嫉妬心も現れるが、それは素直な情動の表出であり、それがすべて悪いわけではない。様々な情動を伴いながら、全般的には落ち着いて同じ時間を共有できるようになったことは大きい成果である。

V. 個別の観察

1. 生徒Aの学習活動と評価

「正確なリズム打ちができない」「テンポに合わせられない」という課題を抱える生徒 A の指導法として、太鼓の達人の使用でリズム感の獲得が可能ではないかと考えたが、結果的には2か月という時間的なことなどもあり、大きい成果は上がらなかった。しかし、様々な意欲の芽を表出している様子は度々見られた。

ビデオ観察の過程で、2つの問題点を見つけ出した。1点目は「リズムの基本スキルが未獲得である」という問題であり、目と耳と手の協応ができていないため、時間をかけてくり返し学習をする必要があるということ。2点目は「正しいルール理解不足」である。図2にその原因と対策を示す。

生徒Aの結果画面の点数を見てみると、初回から4回目までに、10,000点ずつの向上が毎回見られた。ゲーム実施時の教師の目から見たリズム感には、大きな効果は感じられなかったが、点数的にはアップしている。このことは、全60小節、コンボ数147回のうち、どの部分が叩いていたのかなどのチェックができれば、新たな考察が生まれると思われ、このことについても今後の課題としたい。

2. 生徒Bの学習活動と評価

生徒Bについては、「正確なリズム打ちができない」という課題を解決するために、太鼓の達人での指導が有効ではないかと考えた。結果的にはリズムの正確性が高まるという成果は上がらなかったが、生徒Bにおいても、様々な意欲の芽を表出したことは成果と捉えてもよいであろう。その反面、ビデオ観察から不安感が強いことが問題点として浮かび上がった。その「強い不安感」に対する原因は見通しがもてないことと、場の雰囲気からくる不安であることが窺われ、一人で行う活動に自信がもてない発達段階であることを理解して教師が対応する必要がある。生徒AとBについては、今回の検証授業の取り組みの中で個別の授業を取り入れずに行ったため、生徒C、Dの自立活動個別指導の併用組とは、違うプロセスを辿ってしまった。生徒AやBについても、課題によっては、個別の指導が必要な場合もあると思われ、集団活動における指導の限界も考慮すべきことであろう。生徒Aと同じように生徒Bについても、課題によっては、個別指導が必要であると思われるため、その時間の確保や授業における工夫が求められる。

教師が生徒との信頼関係を築き、安心して頑張れるための心の拠り所になることで、不安感を減らし、活動を行う意欲につなげることができると思われる。

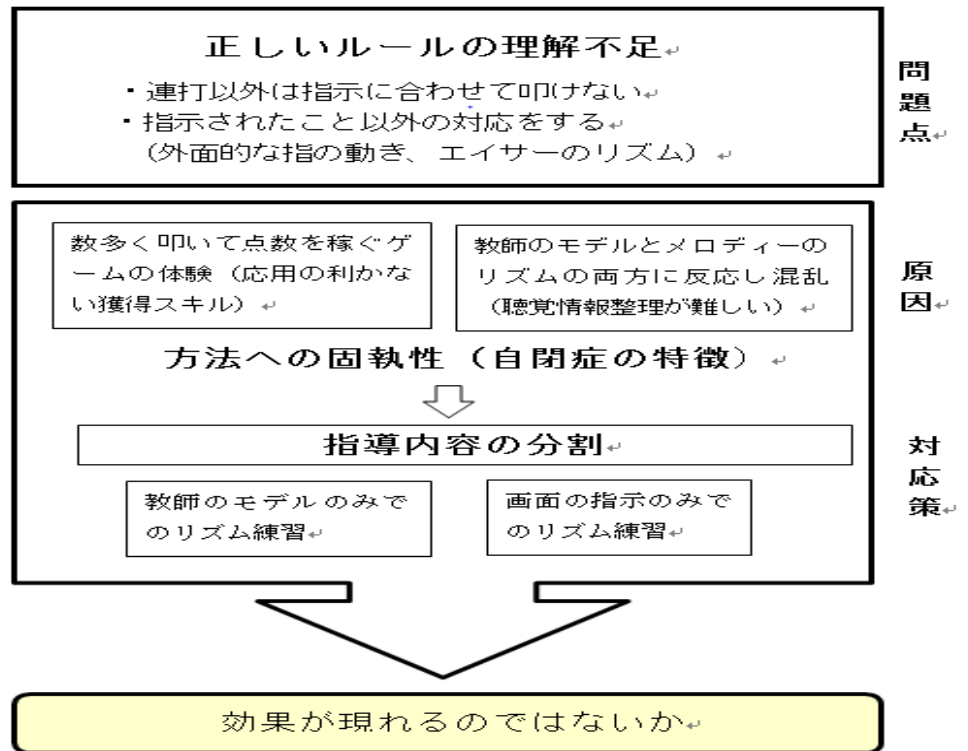


図2 生徒Aの問題点と対策 (正しいルールの理解不足に関して)

3. 生徒Cの学習活動と評価

生徒Cについては、「日常生活での興味や意欲の喚起」という課題を解決するために、太鼓の達人での指導が有効ではないかと考えた。生徒Cは元々リズム感がしっかりとしていることが確認されていたが、授業の内容や流れによっては正確にはできないこともあった。しかし、自立活動として考えたとき、様々な意欲の芽を表出しほぼ一人でゲームを楽しめるまでになったことは大きい成果であった。そこで、生徒Aのように、正確なルールの把握を目標にするのは難しいかもしれないが、個別の指導を継続することでより高いレベルの技術や、人間関係のスキルを身につけることができるのではないかと考える。

4. 生徒Dの学習活動と評価

生徒Dについては、「一人でできる力をつけたい」という課題に取り組むために、太鼓の達人での指導が有効ではないかと考えた。「一人で」という目標に近付けるためには支援を減らしていく予定であったが、支援を減じることで意欲の減退が見られ、支援の減らし方や生徒に寄り添いながら手を離していく必要性が示唆された。しかしその一方で、様々な意欲の芽を表出し担任と共にゲームの時間を楽しみ、順番を待つことができるようになったことは成果といえる。今は人との関わりが必要な時期であるが、いずれ成長と共に自立課題ができるような時期が訪れたとき、支援の程度を考慮するために、生徒の実態を正確に把握し、的確に判断することが、教師に求められる。

VI. 考察

宇佐川(1995)は、聴く力とききとる力の発達について、初期段階の子どもにとって視覚刺激よりもうけとめやすいことを述べている。本研究においても一部の生徒に、聴覚への集中と思われるよそ見と視線はずしが見られた。

今回抽出した4名の自閉症の生徒以外にも自閉症の生徒は数名含まれていたが、ダウン症児も含め、よそ見はすべての生徒に表出した行動ではなかった。言語活動の活発な生徒たちは、画面に集中していることが多く、リズムのアニメーションを見て叩くというルールを理解していたためか、よそ見らしき行動は見られなかった。抽出した生徒Aについても、日常会話ができる発達段階のため、よそ見や視線はずしは見られなかった。

しかし、言語面での遅れがある生徒たちは、抽出した生徒B、C、Dと同様に、よそ見や視線はずしが見られた。言語の面でいうと、生徒Cは返事をすることはでき、会話の内容はある程度理解しているが、一語文の会話が長く、連続した会話は難しい。言語面での遅れのある生徒たちは、聴覚優位であると思われるため、視線はずしについても、情報の抑制という意味で行っていることが示唆される。

また、iPadを利用した太鼓の達人の授業には、生徒の興味・関心を高める効果が認められた。普段、様々なゲーム機器に触れている子どもから、あまり触れることのない子どもまで、自分の番がくるのを喜ぶ姿や、実際に手で触れてゲームを楽しむ姿が見られ、どの発達段階の子どもも意欲的に取り組んでいた。車椅子に座って授業を受ける生徒も、iPadを手元に移動して教師が支え持つことで、手や指で画面に触れるだけの操作で容易に楽しむことができるなど、各種の障害を持った生徒にとっても操作性は良好であった。

教材として使用した音楽ソフト「太鼓の達人」は、画面のアニメーションの動きを楽しみながら演奏ができること。最後の結果画面までの流れがはっきりしており、始まりと終わりがわかりやすく、自分の持ち時間がわかることなどの利点が確認された。iPadのすぐに起動できる利便性の高さや操作性の良さ、太鼓の達人の音楽的な質の高さやアニメーションのわかりやすさも、生徒の意欲を高める教材として効果的であった。また、大型テレビなどの外部ディスプレイとの接続によって、操作画面の情報を共有できるため、プレイの順番待ちをしている生徒たちも一緒に学習を進めることができる。

生徒の活動に対して、適切なほめ言葉でやる気を促すことは重要であると思われるが、本研究での映像解析からは、安易な使用が逆効果をもたらす可能性を示唆する結果が得られた。生徒Aについては、リズムを捉えるのが難しい状態にあり、正確なルールやリズムがなかなかつかめないう状態であった。常に真面目で積極的な生徒Aは、自分が上手に操作できていないことをうすうす感じてはいるが、違いがわからないため修正もできず、本人にはどうしていいかわからない状態に陥っていたと思われる。

そのとき、教師の方からは、「がんばったね」といってほめられる場面があり、映像からは、生徒Aが、うまくできていないのにほめられたことで、少し違和感のある表情をしたことが確認できた。生徒Aは、言語理解もでき自尊心も高いということや、人と自分を比較することができる発達段階であることから、本人は間違えたと思っていても、そのことで「がんばったね」と誉められた場合、自尊心が傷ついてしまうことが考えられる。別の多くの場面において、教師の誉め言葉が生徒たちの意欲を育てている様子は確認されており、賞賛の効果は大きいことは周知の事実である。しかし、生徒個々の発達段階に合わせた誉め言葉を工夫

することも必要であると考え。障害のある子どもたちの頑張りは、そのこと自体が多くの努力を必要とするものなので、結果の如何に関わらず単純にほめてしまいがちであるが、本人の意欲をより引き出すためには、本人が目標とする状態への達成感に配慮した適切なほめ言葉が必要ではないだろうか。

Ⅶ. おわりに

別府（1999）は、自閉症児にとっての愛着対象となるには、具体的に快の情動共有経験をどのように作り出すかが重要であり、その経験を通して他者に対する愛着行動を強める契機が生じると述べている。本研究において開発した「太鼓の達人」を教材とする授業は、対象となった自閉症児にとって、快の情動共有体験をもたらし、教師や他の生徒への愛着行動の形成および強化の契機になり得たと思われる。

特別支援学校においても、本研究のような快の情動共有体験をもたらす取り組みを進めることによって、自閉症児の意欲喚起を促し、さらにはそれに基づく他者との愛着関係の形成、ひいては社会性の改善へ道を開く可能性が高まるのではないかと期待する。今後は、情報機器の進歩もますます学校現場と密接にかかわってくることが予想される。開発した教材の更なる改良を進め、障害児に豊かな教育を保障する教育実践に活かしていきたい。

文献

- 1) 別府哲（1999）赤ちゃんの認識世界. ミネルヴァ書房, 193.
- 2) 木村宣孝（2012）特別支援学校の役割. こころの科学 163号,, 58-59.
- 3) 太田昌孝、永井洋子（1992）自閉症の到達点. 日本文化科学社, 4-5, 31-32.
- 4) 桜井茂雄（1997）学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる.誠信書房, 2-7.
- 5) 宇佐川浩(1995) 発達障害児のコミュニケーション指導. 淑徳大学研究紀要, 29, 143-166.

CASE REPORT

Research on Teaching Methods for Enhancement of Autistic Student's Volition and Motivation to Learn: Through Lesson Practices for Using Audio-visual Equipments

Kazumi SUGIO¹⁾ Sachiro KAMIZONO²⁾

- 1) Graduate School of Education, University of the Ryukyus
- 2) Faculty of Education, University of the Ryukyus

ABSTRACT

It has been pointed out that individuals with autism spectrum disorder (ASD) have learning difficulties because of their weak volition and motivation. In special-needs school, it is a very important issue how to enhance their volition and motivation in learning. In this study, we developed the teaching methods for enhancing volition and motivation in learning by using information and communication technology (ICT) equipments. The teaching methods were verified by a music class. In a music class, an application game software for iPad, named 'taiko no tatsujin', was used as a teaching material. Activities of students in a music class were recorded by videotapes. Through the analysis of videotapes, following results were obtained. 1) It was founded that they averted their eyes from iPad, when they paid attention to auditory stimulation. 2) Having the stimulus-bounded cognitive characteristics, they could not apply to new games. 3) It was important to instruct in considering their self-esteem. From these results, 'taiko no tatsujin' proved valid for enhancing volition and motivation in rhythm learning.

<Key-words>

autism spectrum disorder (ASD), special-needs school, ICT, music class, rhythm learning

takazu2525@gmail.com (Kazumi SUGIO)

Total Rehabilitation Research, 2014, 1:105-114. © 2014 Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

— Editorial Committee —

Editor-in-Chief JAPAN Atsushi TANAKA University of the Ryukyus

Editor-in-Chief KOREA Changwan HAN University of the Ryukyus

Editorial Board

Hideyuki OKUZUMI	Tokyo Gakugei University
Nagako KASHIKI	Ehime University
Yuichiro HARUNA	National Institute of Vocational Rehabilitation
Hyunuk SHIN	Jeonju University
Eunju LEE	Director, Dobong Senior Welfare Center

Total Rehabilitation Research VOL.1

発行 平成 26 年 2 月 28 日
発行人 Keiko KITAGAWA ・ Youngjin YOON
発行所 Asian Society of Human Services
〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1
TEL/FAX 098-895-8420

定 価 ￥2,000 円 (税別)

*落丁・乱丁本はお取り替え致します。

*本書は、「著作権法」によって、著作権等の権利が保護されている著作物です。本書の全部または一部につき、無断で転載、複写されると、著作権等の権利侵害となります。上記のような使い方をされる場合には、あらかじめ本学会の許諾を求めてください。

Printed in Japan

Total Rehabilitation Research

VOL.1 February 2014

CONTENTS

REVIEW ARTICLES

The Significance of Comprehensive Rehabilitation..... **Masahiro KOHZUKI** · 1

A literature review on non-pharmacological intervention and risk factors for mild cognitive impairment..... **Minji KIM**, et al. · 12

ORIGINAL ARTICLES

Influences of Stimulus Array, Stimulus Material, and Severity Level for Intellectual Disability on the Cancellation Task in People with Intellectual Disabilities..... **Ryotaro SAITO**, et al. · 23

Consideration of support for the actual conditions of education informatization that use of ICT in special needs education in Japan..... **Sunhee LEE** · 29

A Study of Consideration for Employment of Persons with Disabilities in the Field of Education..... **Kohei MORI**, et al. · 42

Current Situations and Issues on School Consultations for Regional Support by Special Needs Schools : Based on a Comparison of School Consultations with School Counselors..... **Hikari ISHIKAWA**, et al. · 57

SHORT PAPERS

A Literatural Study for Development of the Japan Elderly Successful Aging Scale..... **Moonjung KIM**, et al. · 76

Prevention of Bed-bound in the Elderly: A Literature Review..... **Chaeyoon CHO**, et al. · 87

Investigation of Special Needs Students School Library..... **Haruna TERUYA**, et al. · 95

CASE REPORTS

Research on Teaching Methods for Enhancement of Autistic Student's Volition and Motivation to Learn: Through Lesson Practices for Using Audio-visual Equipments..... **Kazumi SUGIO**, et al. · 105

Processing Model of Problem Solving in Children with Autism Spectrum Disorder: Based on a Case Study of Learning Support for a Fourth Grader Girl with Autism Spectrum Disorder..... **Noriyuki AGARIE**, et al. · 115

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan